

## 第4章

# JET青年たちの記録

## 被災地を支援したJET参加者とOBたち

(財)自治体国際化協会業務部前企画調整課長 谷 雅之

東日本大震災後の復興にあたっては、JETプログラムの参加者およびOBの多くの方々からも心温まるさまざまな支援をいただいた。

支援の背景や形態は多様であるが、現役参加者は「自分がいる地域の復興に積極的に関与したい」、「自分が日本にいる間に起きた震災に対し、被災地の復興の力になりたい」という思いが、(居住地でもある)被災地に残ったの復興支援や、被災地に赴いてのボランティア活動に従事するなどの原動力となっているように見受けられる。また、現在では海外に暮らすOBからも、北米を中心に多額の寄付金が寄せられたほか、被災地でのボランティア活動への参加もあった。さらに特筆すべきは、津波により神に召された参加者のご家族からいただいた現地の学校および子どもたちへの支援活動である。

これら無数の善意をつなぐもの、それは次世代を担う子どもたちへの教育支援といえよう。JETプログラムの参加者は、ALT(外国語指導助手)が圧倒的に多いことにも起因するのであろうが、同時に、地域レベルでの交流をテーマとするJETプログラムの趣旨を、参加者たちが身をもって具現化しているようにも見える。

### 被災者であるJETが被災地に残る

震災直後、母国政府による日本からの退避勧告が出されたこともあり、帰国を急いだ外国人も多いと伝えられた。そうした中、自らも被災しながら被災地に残り、あるいはいったん帰国したものの新学期開始前までには復帰して、ALTとして子どもたちの指導にあたり、CIR(国際交流員)として地域在住の外国人住民への対応にあたったJET参加者もいた。この中には、子どもたちのための基金を設立した者、避難所になった職

場で日本語を用いて日本人の被災者支援をした者、自らのアパートも津波の被害を受けて避難生活(中には先生のご自宅にホームステイをした事例もある)を送りながらJETとしての活動を続けた者などもいた。

また、春休み期間中や週末などには、がれき撤去などを通じて地元の復興支援にあたったJET参加者も多く、その活動は地元メディア(新聞、ラジオなど)のみならず全国メディアにも取り上げられた。

被災地以外のJET参加者も、ゴールデンウィークなどに被災地でボランティア活動を行った。この中には群馬県内の参加者のようにバスをチャーターして県単位で行った事例もある。さらに秋田県内では、被災地に新鮮な果物などを届けようという運動「フルーツ・ツリー・プロジェクト」も行っている。また、遠く宮崎県内のJET参加者がベニヤ板や食材を持参し、がれき撤去や音楽演奏などの活動をした事例も報告されている。

### OBも寄付やボランティアを

被災地への支援は、JETプログラムのOBからも寄せられた。いまや5万人を超えたOBの中には、日本やかつて自らが所属した自治体を「第2の故郷」として深い愛着を感じ、「恩返し」として復興支援に協力したいと思う者が多いことが背景にあるとされている。

このうち、JETプログラム同窓会(JETAA)では、全米の19支部が一体となって「日本震災復興支援基金」を設立し、87,500ドルの寄付金を活用して被災地の児童・生徒の進学や学習支援(この中には、後述する「テイラー文庫」への支援や、モンゴメリー・ディクソンさんが教えていた岩手県陸前高田市内への生徒のための自習室設置など

も含まれる)や、JET参加者やOBによる被災地でのボランティア活動支援などを行っている。

また、2011年10月にJETAA国際委員会が都内で開催された折には、約20人のJETOBたちが陸前高田市を訪問してがれき撤去のボランティア活動を行った後、同市の戸羽太市長を訪問し、市内の子どもたちへの教育支援について意見交換を行った。

個人レベルでも、現在は米国で医師として活躍中のスチュアート・ハリス氏(元岩手県岩泉町ALT)が被災地を訪問したほか、自国で開催したチャリティー美術展の収益金を全額寄付したOBの事例などが多数、報道されている。

### 愛娘の思いを伝えるご家族

不謹慎の<sup>そし</sup>謗りを免れないが、今後中長期的に、我々日本人にとっても、(少なくとも同国籍である)米国人にとっても最も記憶に残るのは、ご自身を捧げられた2人のJET参加者であるのかもしれない。

宮城県石巻市のALTだったテイラー・アンダーソンさんは、生徒の下校を見届けた後、自宅への帰り道で巨大な波に飲み込まれた。子どもたちからの人気も絶大だったテイラーさんは、幼少のころから読書をこよなく愛した女の子だったという。

そんな彼女が初めて日本語に触れたのは小学校時代。「となりのトトロ」にも魅せられたようだ。中学時代も日本語学習を続け、大学入学後は国際関係論を専攻する傍ら、日本語や日本史についても本格的に学んだという。短期間ではあるものの日本滞在も経験し、日英両語で日本人店員とのコミュニケーションも満喫したテイラーさんは、その後国際関係への関心を高め、卒業後にはJETプログラムに参加した。

ご両親は、テイラーさんの生き方を伝えるべく震災後ほどなくして「テイラー基金」を設立した。さらに「読書は夢を考える手段」として、愛娘の名を冠した「テイラー文庫」を創設し、2011年9月に教え子の学び舎である万石浦小学校<sup>まんごくうら</sup>で贈呈式を行った。この本棚は、やはり震災で3人のお子さんが犠牲となった(うち2人はテイラーさんの教え子)木工作家である遠藤伸一さんがボラン

ティアで作成されたものである。テイラー文庫は最終的には、テイラーさんが教えていた石巻市内の他の小中学校など7か所に設置される予定だという。

アラスカ出身で岩手県陸前高田市のALTだったモンゴメリー・ディクソンさんも、テイラーさん同様に地元の方や子どもたちの人気者だったという。彼は、その瞬間を市の教育委員会の事務室で迎えたという。司馬遼太郎の大ファンで、当日の朝にはその詩を英訳していたというエピソードが、「JETプログラム25周年シンポジウム」の際にジョン・ルース駐日米国大使から紹介された。

米政府は、地域に解け込んで住民や子どもたちに愛された2人の活躍と遺志を<sup>しの</sup>偲び、2011年夏に2人の教え子を含む被災地の児童・生徒16人を米国に招待したほか、「トモダチ作戦」の一環として被災地の高校生の米国への留学支援を行うこととなった。

震災復興へのJET関係者の支援は、その輪を広げ、絆を深めながら今後もさまざまなドラマを織りなしていくことであろう。

### 追記

2012年4月、アラスカの海岸で日本語が書かれたサッカーボールが発見された。岩手県陸前高田市の小学生が、転校記念に仲間から贈られたボールだという。アラスカと陸前高田市。モンゴメリーさんの人懐っこい笑顔が目浮かぶようだ。

JET参加者およびOBによる東日本大震災後の支援活動については、これまでも「自治体国際化フォーラム」やクレアメールマガジンで取り上げてきた。掲載号が多岐に及ぶため本稿においては逐一紹介することは控えるが、読者の皆さまに参照していただければ幸いである。



陸前高田市でボランティア活動に参加するJETAA国際委員会

## 「絆」 テイラー・アンダーソン 記念基金

アンディー・アンダーソン (東日本大震災で亡くなられた宮城県石巻市JET参加者テイラー・アンダーソンさんの父)

わが娘テイラーは、バージニア州アシュランドにあるランドルフ・マコン大学で、2年生から3年生になる夏に、学部生向け夏期研究奨学金を受け、日本の作家である村上春樹氏について学ぶことになりました。村上氏の作品から彼女が学んだことの一つは、問題を解決するためには人々との「絆」が必要だということです。その彼女が学んだことは、今回の東日本大震災および津波によりもたらされた多くの課題に対して、まさに必要なことです。テイラー基金で私たちが実現しようとしているのは、おそらくテイラーが望んでいるように、学校、学生および家族が震災から立ち直ることを支援するために必要な結びつきを導く「絆」を作ることです。JET参加者たち、テイラーの日本人の友だち、藤崎大使ご夫妻が、この希望を叶えるため支援をしてくださる日本人々と私たちを結びつけてくれました。

私たちが今行っており、そして今後何年も続けていくであろうことは、テイラーの夢であった私たち2つの国を結ぶ架け橋を作ることになるのです。家を失った家族や労働者が前向きに生きていくようになるまでには長い年月が必要です。現在、おそらく彼らは仮設住宅に仮住まいし、今後どこかへ移り住むのかまたは故郷に帰るなど、たくさんの決断をしなければなりません。地域経済の面でも同じ状況にあります。

人々が生きるための決断を下している間にも、テイラーは生徒のことを気に掛けているだろうと私たちは思います。今後も続く復興への長い道のりの過程においても、生徒たちには、成長し学習し続ける機会が必要なのです。これこそが、私たちがテイラー基金で実施していきたい「絆」なのです。生徒たちは親と教師によって教育されていきます。テイラー基金は、その努力を支援していきます。

1つの例は、テイラーが教えた7つの学校それぞれに設置されるテイラー・アンダーソン文庫です。テイラー・アンダーソン文庫が納められる書

棚は、津波で3人の子どもを失った（そのうちの2人はテイラーの教え子）遠藤伸一さんによって被災地で作られています。テイラーの好きな児童図書60冊と学校が選んだ200冊以上の本は、テイラー文庫の一部となっています。

ジーン、ジュールズ、ジェフと私は昨年9月、<sup>まんごくうら</sup>万石浦小学校に最初のテイラー文庫を作るため、石巻市を訪れました。9月6日に行われたテイラー文庫の贈呈式の時、私たちは、テイラーの小学校6年生の教え子の前で次のようなことを話しました。



万石浦小学校のテイラー文庫贈呈式 (家族と遠藤さん)

「書棚と蔵書の献辞には、『2011年3月11日に亡くなったテイラー・アンダーソンおよびすべての家族をしのんで』とあります。テイラーを失った私たちの心には永遠に平穏は訪れません。そして、3月11日に家族を失った他の多くの方々も同じ気持ちだと思います。私たちが平穏であるためには、同じ境遇にある彼らのことを尊敬し、思い出出すことが必要です。彼らのようなお手本に刺激を受け、それを学ぶことだと思います。夢とともに生きたテイラーから刺激を受け、これらの本やコンピューター・ソフトが皆さんの夢を見つけてくれるきっかけになることを願っています。皆さんがテイラー文庫の本を読んだことで、自分の夢を見つけ、勇気とエネルギーを持って生きていくことを望んでいます。そのことがテイラーを幸福にしてくれます。この贈り物は、テイラーのあなたたち教え子への愛情から生まれたものであることを忘れないでください」



万石浦小学校のテイラー文庫

渡波中学校および渡波小学校に新たにテイラー文庫

が設立されました。渡波地区の復興計画は策定中であり、これらの学校は仮設校舎です。さらに、私たちは、特別に支援を行いたいというアメリカのいくつかの組織とも協力しています。例えば、ワシントンDCにある「Hearts for Japan」という組織は、テイラー基金を通じて他の石巻の学校へ本を寄贈しました。

テイラー基金はNPO法人リビングドリームスやスマイルキッズジャパンとも連携しています。スマイルキッズジャパンは、長期的に孤児のサポートを行っています(注1)。

テイラー基金は、気仙沼市の児童養護施設である旭が丘学園を支援しています。昨年の夏、14人の子どもが、英語アドベンチャー・キャンプで素晴らしい時を過ごしました。施設側が大変喜んでくれたので、この夏は、参加できる子どもを30人に増やす予定です。

また、基金は、クリスマス・ウィッシュ・プログラムを支援しました。これは、子どもたちと一緒に選んだ贈り物を72人の子どもへプレゼントし、JET参加者を交えたクリスマスパーティを行うものです。昨年と同様に、今年も行う予定です。

また、テイラー基金は、高校3年生を大学に進学させるために「ボランティア秋田」が行う資金調達運動に協力しています。JET参加者は、東北のいくつかの児童養護施設で「ホーム・コミュニケーション・マネージャー」となり、彼らが積極的に子どもたちと関わることによって子どもたちへ大きな影響を与えています。

基金は、東日本大震災により孤児となった200人を超える子どもを、児童養護施設ではなく親戚の家で生活ができるように支援しました。教育費は平均約260米ドル/月で、NPO法人「東日本大震災こども未来基金」が支払っている最も大きな支出となっています。

さらに、多くの大学が、被災した東北の学生に奨学金を支給していますが、学生の家族は、3,000米ドルの奨学金を受けるために入学試験料を払わなければなりません。テイラー基金はNPO法人「Hope for Tomorrow」を通じて、入学試験料を支援してきており、今後も支援する予定です。

石巻市がある宮城県には、120人のJET参加者

がいます。テイラー基金は、授業を行う教室だけでなく、彼らの勤務する学校や地域でより活発なJET参加者でありリーダーになってもらうため、JET参加者で組織する宮城AJET (JET参加者の会)に助成金を提供しています。この取り組みは、宮城県CIRのキャメロン・ピークおよび宮城AJET役員の仲間による呼び掛けにより始まりました。さらに、このグループは、テイラー文庫のためにテイラーの愛読書を和訳してくれました。

今後長年にわたり、テイラー基金は、テイラーのように夢を持った学生を援助するため、交流と育英事業を支援していきます。この事業は、YMCAおよび石巻専修大学と協力していきます。今年、テイラーが教えた中学校のうちの3校を代表する生徒たちが、テイラーの故郷であるバージニア州リッチモンドを訪れる予定です。

現在までに330,000米ドル以上が、テイラーへの敬意とともに集められました。これは、時間と労力を惜しみなく提供してくれた聖カタリナ学園の存在なくして実現することはできませんでした。また、聖カタリナ学園のおかげで、寄付金の100%が日本での私たちの事業に使うことができます。さらに、この学園はテイラー基金が行っているプロジェクトを支援するため、来年、10~12人の高校生による日本への春休み旅行を企画しています(注2)。

このように、テイラー基金が東北の復興を支援しているいくつかの「絆」があります。復興において非常に重要なことは、どのようにして家族や友だち、家や仕事を失った何十万人もの被災者が、感じている喪失感から立ち直るかです。それは、希望や刺激そして癒やしを与えてくれる人と人との「絆」によってもたらされるでしょう。JET参加者たちは、毎日「絆」を築く機会があり、それは東日本大震災からの復興において、非常に大切なことなのです。



テイラーさん

(注1) スマイルキッズジャパンホームページを参照  
<http://www.smilekidsjapan.org/>

(注2) 聖カタリナ学園ホームページを参照  
<http://www.st.catherines.org/tayloranderson>

## Connections

# The Taylor Anderson Memorial Gift Fund

Andy Anderson

*This article was kindly contributed by Andy Anderson, father of Taylor Anderson. Taylor was a JET Programme Participant based in Ishinomaki City, Miyagi Prefecture, who passed away in the Great East Japan Earthquake and Tsunami.*

Taylor was awarded a Summer Undergraduate Research Fellowship between her sophomore and junior years at Randolph Macon College in Ashland, Virginia. She chose to study some of the works of Japanese author Haruki Murakami. *One of the points she concluded Murakami made was there is a need for connections among people for problems to be solved.* That conclusion is certainly on target for the challenges created by the Great East Japan Earthquake and Tsunami. What we strive to do with Taylor's fund is make the connections which lead to relationships that will help schools, students and families recover as we believe Taylor would wish. The JET community, Taylor's Japanese friends, and Ambassador and Mrs. Fujisaki were instrumental in connecting us to the people in Japan who could help make this wish a reality.

What we are doing now and hope to do for years to come is to build on Taylor's dream to be a bridge between our two countries. One level of connection that will take many years to solve is how displaced families and workers go forward. They are perhaps in temporary housing now and there are so many decisions to be made that will affect whether they start over somewhere else or return to their family home. The same can be said for businesses as well.

While those decisions are being made we think Taylor's focus would be on students. They need the opportunity to continue to grow and learn while the

long process of reconstruction continues. That is the connection we are working on making with Taylor's fund. Those students will continue to be nurtured by their parents and teachers. Taylor's fund supports that effort.

One example is the Taylor Anderson Reading Corners or Bunkos that will be at each of the seven schools in which Taylor taught. The book shelves are being made locally by Endo Shinichi-san who lost three children in the tsunami, two of whom were taught by Taylor-sensei. Sixty of Taylor's favorite children's books and over 200 books chosen by the school are part of the Taylor Bunko.

Jean, Julz, Jeff and I traveled to Ishinomaki this past September to help dedicate the first Taylor Bunko at Mangokuura Elementary School. Part of what we shared with Taylor's sixth grade students at the September 6<sup>th</sup> Taylor Bunko Dedication was:

"The Dedication on the bookshelf and the book labels read 'In memory of Taylor Anderson and all loved ones lost on March 11, 2011.' We will never be at peace with losing Taylor and we share that feeling with the many others who lost loved ones on March 11. What we can be at peace with is how well we honor and remember them. And most of all, how well we are inspired and follow their good examples. Reading inspired Taylor to live her dreams and we hope the books and computer software will help inspire you to find and live yours.

We hope when you think of the Taylor Bunko you think of finding your dreams and having the courage and energy to live them. That would make Taylor happy. But we hope most of all that you remember this gift is from the love that Taylor had for you, her

students.”

Two additional Taylor Bunkos have been installed at Watanoha Junior High School and Watanoha Elementary Schools. These schools are in temporary facilities while the Watanoha area reconstruction plans are being formulated. We have also worked with groups in America who want to tailor their giving in a specific way. For example, “Hearts for Japan”, a group from Washington, DC contributed books to other Ishinomaki schools through Taylor’s fund.

Her fund is working with Living Dreams: Smile Kids Japan (<http://www.smilekidsjapan.org/>) to provide long term support to orphans. Taylor’s fund is supporting the Asahigaoka Gakuen children’s home in Kesenuma. Fourteen children had a wonderful time at English Adventure Camp this past summer and the home administrators were so pleased with the results that we will expand the program to thirty children this summer. The fund also supported a Christmas Wish Program which provided personally chosen gifts to the 72 children and gave them a Christmas party with JETs. That will be repeated this year as well. Taylor’s fund also participated in Volunteer Akita’s successful fund raising drive to send a high school senior to college. JETs are Home Communication Managers for some of the Tohoku Children’s Homes and their active involvement makes a big difference to these children.

Funds have been donated to help the more than 200 orphans from the Tohoku disaster stay in the homes of a relative rather than go to a children’s home. Average school costs are approximately \$260 a month which is the major expense “The Fund for the Future of Children affected by the Great East Japan Earthquake” pays.

Also, many universities have provided scholarships for Tohoku students affected by the disaster, but the students’ families must pay entrance exam fees approaching \$3,000 to be able to take advantage of the scholarships. Taylor’s fund has and will help

with these fees through a non-profit called “Hope for Tomorrow”.

There are 120 JETs in Miyagi, the prefecture in which Ishinomaki is located. Taylor’s fund is providing micro-grants to empower Miyagi JETs to go beyond the classroom to be active participants and leaders in their schools and communities. This idea was created and implemented by CIR Cameron Peek and his fellow MAJET officers. This group has also added Japanese translation to Taylor’s favorite books for the Taylor Bunkos.

Long term, Taylor’s fund will support Exchange and Scholarship programs for years to come all with the idea of helping students live their dreams as Taylor did. We are working with the YMCA and Ishinomaki Senshu University on these programs. This year a small number of students representing three of the Junior High Schools where Taylor taught will visit Taylor’s hometown of Richmond, VA.

Over \$330,000 has been raised in Taylor’s honor to date. We couldn’t do this without St. Catherine’s who donates their time and expertise so that 100% of the money donated goes to these efforts in Japan. They are also organizing a spring break trip to Japan next year for 10-12 high school students to explore Japan and work on projects related to Taylor’s fund (<http://www.st.catherines.org/tayloranderson>).

So these are some of the connections Taylor’s fund is making to help with recovery. A very important part of the recovery is how do the hundreds of thousands of individuals affected, whether it be the loss of a family member or friend, their home or job, heal from the personal loss that they have felt. That will happen with very personal connections which offer hope, inspiration and healing. The JET community has the opportunity to make those connections every day and are a vital part of recovery from the Great East Japan Earthquake and Tsunami.

英語

# 東日本大震災とその後

宮城県国際交流員 キャメロン・ピーク

東日本大震災は、JET経験において、PA（JET参加者のカウンセリング担当者）としての経験において、そして私の人生においても、今まで直面した中で最も大きな挑戦となりました。

私が宮城県庁13階のオフィスで仕事に、地震を知らせる警報が鳴り、その直後、大きな揺れが襲ってきました。私には、PAとして宮城県内で活動している70人のJET参加者の安全を確認する責任がありました。2日前の3月9日に宮城県内で大きな地震があり、私は、地震直後にJET参加者の安否を確認する難しさをよく知っていました。同僚とともに、JET参加者へメールを送ったり、携帯電話に電話をしたり安否確認を始めました。名取市の水田を襲う津波の映像や気仙沼市へ到達した巨大な壁のような津波の映像がテレビで報道されるにつれ、現実が起こったことがはっきりわかってきました。私たちにできることはないが、とにかくひたすら電話をかけ続け、電話がながることを祈り続けました。それから数日間、私たちは、気仙沼市で3人、南三陸町で2人、石巻市で1人の海岸地区にいた連絡がつかないJET参加者たちとなんとかして連絡する方法がないか考えていました。そのような中、米国からの情報、他のALTからのうわさ、大使館からの報告書など、連絡がつかないALTに関する間違っただけの情報や未確認の報告がさまざまところから舞い込んできて、私たちを混乱させました。私は上司とともに確かな情報を得るために石巻市、南三陸町、気仙沼市に行きました。最終的には、一人を除いて、生存が確認できました。石巻市で活動していたテイラー・アンダーソンは津波の犠牲になっていました。テイラーの死を含めすべての被災者の死はとても悲しいことです。

しかし、日本中、そして世界中からの心温まる援助により、海岸地方に住む被災者は勇気を得て、宮城県や東北地方の復興への第一歩を踏み出すことができました。私が最も驚いたのは海外からの

援助の規模でした。海外からの大量の物資や寄付を見て、私は日本が世界中から愛されていることを実感しました。

この経験は、どのようにとは言えませんが、私を人として明らかに成長させてくれました。確かに言えることは、この経験は、CIR（国際交流員）が何かという私の理解を完全に換え、私が日本にいる目的を明確にしてくれました。大震災前はCIRとしての私の立場の有用性について疑問を持っていました。私のCIRとしての「目的」は、「国際化」の促進ですが、毎週木曜日に退職者グループへ英会話を教えることは、国際化の促進に結びつくのでしょうか。小学校、中学校、高等学校へ行き、カウボーイと彼らのアメリカ南西部の文化における役割について生徒に教えることは「国際化」への効率的な方法だったのでしょうか。このことについて、時々考え過ぎてしまい、結局、混乱するだけでした。しかし、震災後は、私はこのような混乱を忘れ、自分自身に一つの問いをしていました。「私がしていることは宮城県の復興の手助けになっているか」今はこれがすべてであ



南三陸町でのボランティア活動

り、この質問は今まで感じていなかったCIRとしての大切なことを私に与えてくれました。祖国に帰り、資金集めのイベントを開催することは、宮城県を助けることになるのでしょうか？もちろん。アメリカのマンガ出版社に被災地へマンガを送るように依頼することは宮城県を助けることになるのでしょうか？なるでしょう。英語の児童書を翻訳し、石巻市の被災した子どもたちに送ることは宮城県を助けることになるのでしょうか？もちろん、それは、これから宮城県に住み続ける子どもたちが世界を理解する手助けになるでしょう。特に、海外からたくさんの支援物資が届くことを目の当たりにして、CIRという立場がいかに重要かをはっきりと認識しました。私たちCIRは、お互い興味があり交流する意思があるそれぞれの文化を結びつける架け橋なのです。

この大震災は、日本をどのように変えたのでしょうか。この大震災は、日本人のところに深い印象を残したと私は感じています。たぶん、それは、9.11の後アメリカ人のところに印象を残したのと同じように。しかし、ここに残る印象とは何か、大震災がどのように将来を変えたかを予測することは大変難しく、優秀な社会人類学者しか答えを出せないでしょう。大震災が与えた影響について、いくつか明確な変化がありましたが、私の頭の中に浮かんだ2つのことについて述べます。

まず一つ目は、ボランティア活動に対する考え方の変化です。震災前は、「ボランティア活動」は、日本ではそれほど盛んではないと感じていました。私の母国であるアメリカでは、ほとんどの場合、ボランティア活動は広く一般的に行われていて、地域活動や普通のボランティア活動を除いて、この経験が高く評価されることはありません。私が熱心にボランティア活動を行っている日本人を知らないだけかもしれませんが、日本では、アメリカとは違い、ボランティア活動は、あまり行われていないと感じていました。それにもかかわらず、大震災に対する日本全土からのボランティア活動は大きな驚きであったし、大震災から一年がたった今でも続いていることはさらに大きな驚きです。2011年のゴールデンウィークには、あまりにも多くのボランティア希望者が来たため、地域

のボランティアセンターが閉鎖に追い込まれました。今でも、ほぼ毎日、私はボランティアの方々の支援について、見聞きしており、今後も続いていくことを願っています。

二つ目は、個人的な話になりますが、日本人の私に対する見方が変わったように感じています。震災前は、日本に滞在する外国人として、初対面の人からの最初の質問は、「どちらから来られましたか」もしくは「英語の先生ですか」のいずれかでした。これらは、若い白人の男性である私に対してごく自然な質問です。しかし、これらの質問はいつも私が外国人であることを思い出させます。しかし、震災後は、このようなことを聞かれることがないのに気づきました。私がどこから来て、何をしているかではなく、私の大震災での経験や私が復興のために何をしているかに関心がありました。「どこから来ましたか」は「大震災の時どこにいましたか」に、「英語の先生ですか」は「ボランティアの方ですか」に代わりました。このように、東北地方の人々と同じ経験をしたことにより、私が地域と一体になったような感覚を持つことができました。私に対する見方が全く変わったと感じました。以前は、彼らは私のことを「日本を経験するためにここにいる」と感じていましたが、今は、私は彼らが「復興の手助けをするためにここにいる」と感じています。

復興への支援に対する私への期待は少しも重荷ではありません。むしろ、私への期待はとてもうれしいことであり、地域への一体感を感じることができ、そして、私を本当の「宮城県民」にしてくれると感じています。

※本稿の英文をクレアのホームページに掲載しています。



Cameron Peek

アメリカ合衆国アリゾナ州出身。アリゾナ大学で経済学と東アジア研究を専攻。2009年の卒業後、JETプログラムの国際交流員（CIR）として宮城県で勤務し、現在3年目のJET参加者。趣味はブラジリアン柔術、ドラムなど。

# 福島の実の姿を世界に

福島大学学生課副課長 ウィリアム・マクマイケル

突然ですが、あなたは新渡戸稲造という歴史上の人物を、知っていますか？

多くの人は、この名前を聞いても、あまりピンとこないかもしれません。しかし、私にとって「新渡戸稲造」とは、幼いころからの目標であり、国際交流に関する考え方を教えてくれた人物であります。

新渡戸稲造は、アジア人として初めて国際連盟の事務次長を勤め、日本と世界の友好関係を築き上げる上で多大な功績を残した人物です。歴史家によく「太平洋の架け橋」と評される新渡戸稲造を私が知るきっかけとなったのは、幼いころ読んだ彼の伝記であり、小さいころから今に至るまで私のあこがれの人物です。

なぜここまで新渡戸稲造に対して強いあこがれを感じたかという、彼が国レベルでの国交にとどまらず、著書などを通して日本人に対する固定概念を草の根から変えていった事に、子どもながらに感銘を覚えたからだと思います。日系人に対して偏見が残っていた時代に、外交だけではなく、著書「武士道」などを通して互いの国の実の姿を伝え合う架け橋となった新渡戸に、私はいつしか目標意識を持つようになりました。



ボランティア活動に参加する福島のJET参加者

そして、その目標は、JETプログラムに参加する事で、初めて実現に向けて大きく進んだと思います。2007年から2010年まで国際交流員として勤めていた私は、県内を出張しながら、地域の人々の外国出身者に対する偏見を無くそうと、多文化共生をテーマとした講座を年間20回程度実施しました。まだまだ外国人に対して偏見が残る保守的な地域が多かった福島で、私は自らを例にして、外国出身者の実の姿を伝える橋渡しをしようと、3年間活動を続けました。

そして、JET終了後も福島に残り、福島大学で地域の国際化を促進させるさまざまな取り組みをしていた矢先に、東日本大震災という過去に例のない大災害を経験しました。

大震災による地震、津波、原発事故という3重災害を経験した時、私は不安や恐怖などよりも、「福島を守りたい」という、第2の故郷に対して、自分ができる貢献をしたいという強い衝動にかられました。そう感じるようになったのは、やはりJETプログラムに参加していたおかげだと、今も私は思っています。

なぜならば、JETプログラムの最大の魅力は地域との「絆」を作る事であるからです。私は、その事に、震災後にあらためて気付かされました。

初めて福島県に赴任する事を知った時、日本地図を取り出すまで福島がどこにあるのかさえ知らなかった私は、国際交流員として3年間草の根の国際交流活動を続ける事で、地域との絆というかけがえのない財産をもらいました。そして、福島の美しい風景や、温かい県民性に心から情愛を感じるようにもなりました。

だからこそ、震災からの1年あまり、私は福島の復興に貢献する事こそが地域への恩返しだと信



被災地の空に泳ぐ鯉のぼり

じ、復興に関するさまざまな事業に参加してきました。海外からの支援の窓口となったり、被災地に物資を届ける活動に取り組んだり、JET時代に勤めていた国際交流協会を通して県が発表する放射線防護などの震災情報を英訳したり、さまざまな形で福島に関わりました。また、OBとして、現役のJETたちと一緒に任意団体を立ち上げ、被災地の幼稚園を支援し、沿岸地域のがれき撤去や泥かき、遺失物探索など、さまざまなボランティア活動にも参加を続けてきました。

がれき撤去などのボランティア活動を積極的に行っていたころ、私は生涯忘れる事の出来ない光景を目にしました。その光景とは、津波で全ての家屋が流されてしまった海岸地域で、親と子3匹の鯉のぼりが泳いでいる姿でした。

おびただしい数の灰色のがれきと、真っ青な空の間で泳ぐその姿は、今まで見た鯉のぼりの中で最も鮮やかで、復興を彷彿とさせる姿でありました。しかし、近づくと、その鯉のぼりの下には津波で亡くなった子どもたちを供養する菊の花や、子ども用のお菓子がたくさん供えられてあるのがわかりました。

この光景を見た時、福島が抱える切なさ、復興に向けて進もうという力強さが同時に胸に込み上げてきました。

そして、原子力発電所の事故がきっかけで世界中の注目が福島に集まり、時に海外メディアによる過剰報道や、草の根レベルでの風評被害が発生する現状に対して、新渡戸稲造が著書を通して真の姿を伝えたように、そして、自分自身もJETのころ外国出身者に対する偏見や固定概念を無くそうとしたように、世界に向けて福島の正しい姿を

伝える架け橋になりたいと思うようになりました。

そのため、今、私はその目標に向かって、復興プログラムの企画・実施を職場を通して行っています。JET時代に構築した自治体やNPOとのネットワークを駆使して、海外からの研究要請を支援したり、世界から学生を福島に招きボランティア活動を通して、福島の姿を見てもらう短期留学プログラムを実施したり、さまざまな形で海外への情報発信を行おうと、努力を続けています。

また、国際会議などにも出席し、例えば去年だけでも合計5か国にて、福島の現状について多くの方々と意見交換をさせていただいています。このような草の根の活動を通して、1人でも多くの人に福島の事を正しく知ってもらい、現在の課題や支援の方法を伝えたいと、心から願っています。

災害から復興する力を地域にもたらす人物は、「よそ者」(地域の外から来た人)、「若者」(持続的に活動を続ける意欲を持つ人)、「馬鹿者」(固定概念にとらわれず、率先して行動を起こせる人)の、3タイプの間人であると福島ではいわれています。私は、自分を含むJET青年の多くが、この3タイプに当てはまるのだと思います。福島を愛する外国人であるからこそ、今、地域の力になれるのだと信じ、これからもJET時代に築いた絆を原動力に、新渡戸稲造のような世界との架け橋になれるよう頑張り続けたいと心から思います。

※本稿の英文をクレアのホームページに掲載しています。



William McMichael

カナダバンクーバー市出身。2007年から2010年まで、福島県の国際交流員(CIR)としてJETプログラムに参加。現在、福島大学の学生課副課長として勤務。